情報通信審議会　情報通信技術分科会
技術戦略委員会（第５６回）

１　開催日時　令和７年５月２１日（水）～同年５月２８日（水）

２　開催場所　メール審議

３　出席者（構成員）

相田　仁（主査）、森川　博之、大柴　小枝子、増田　悦子、飯塚　留美、
今井　哲朗、長内　厚、川添　雄彦、児玉　俊介、寺田　健二、平田　貞代、
宮崎　早苗、宮地　悟史、宮田　修次、望月　康則

４　配布資料

資料56-1　意見募集の結果及び意見に対する技術戦略委員会の考え方（案）
資料56-2　第5次中間報告書（案）
資料56-3　第5次中間報告書（案）概要

５　議題

（１）第５次中間報告書（案）に対する意見募集の結果等及び第５次中間報告書（案）について

資料56-1に基づき検討を行い、各構成員から以下のとおり意見があった。
今後、事務局において各意見を踏まえて以下のとおり「意見募集の結果及び意見に対する技術戦略委員会の考え方（案）」及び「第5次中間報告書（案）」の修正を行い、相田主査と相談の上、取りまとめることとした。

○大柴構成員　　意見募集１－２０、および１－２１で、「ディープシークはオープンAIのAIモデルを不正に利用して作られた疑惑がある」との指摘があった。「モデルや学習方法の工夫によって、高い性能をもつ生成AIを実現できる可能性」の実例としてディープシークを挙げていると思うので、以下のように修正することを提案する。
「～、世界中でGPUの供給不足が起こっている。そのような中で、モデルや学習方法の工夫

によって、高い性能をもつ生成AIの実現を目指す動きもある。」

　また、報告書P7の最終段落では、ハルシネーションや著作権侵害のリスクがあることを単に述べているだけで、それらに対して適正に対処していくような研究開発が必要であることなどへの言及がない。これにより意見募集において、多くのリスク懸念に関する意見をいただくことになったのではないか。この段落の最後に、例えば、「それらに適正に対処できるようなAIの研究開発を目指す必要がある」等の一文が必要ではないか。

○宮地構成員　　パブリックコメントのうち、およそ2/3がAIに関するコメントであり、非常に多くの方の興味・関心が集まっている状況を改めて認識した。そうした状況をふまえ、特にAIに関しては正確な記載を期する必要があると思われる。従来でも計算資源の調達にコストをかければ実現できないわけではなかったことから、DeepSeekがもたらした効果を正しく示すため、P7に以下のとおり記載を補足してはいかがか。
「高い性能をもつ生成AIを従来よりも低コストで実現できる可能性を示したと言える。」

○事務局　　いただいたご指摘を踏まえ、報告書案のP7にある「他方で、中国のスタートアップ企業ディープシークは、米国企業の大規模汎用AIよりも小規模な汎用AIを旧型の半導体を用いて構築し、高い性能を実現したと言われている。これにより、モデルや学習方法の工夫によって、小規模なAIで高性能化や低コスト化の実現できる可能性を示したと言える。」という記載を以下のとおり修正することとしたい。
「そのような中で、モデルや学習方法の工夫によって、生成AIの高性能化や低コスト化の実現を目指す動きもある。」
　また、AIによるリスクへの対応について、段落の最後に以下の記載を追記することとしたい。
「こうした現状を踏まえつつ、AIのイノベーションの促進とリスクへの対応を両立させることが求められている。」